

特集 新しい日常に慣れる

—社会を支える現場に目を向けて—

新型コロナウイルスの不安が拭えない中、私たちの日常を支える現場では、感染症対策を組み込んだ新しい日常が始まっている。私たちは生活様式の変化をどう受け止めればいいのか。施設や企業の取り組みを見ながら考える。



売り場のレイアウトを変えて通路を広げた道の駅

買い物では、レジ待ちのソーシャルディスタンスや飛沫感染防止シートなどが日常の光景になりつつあります。食事では「対面を避ける」席の配置など、各店舗が新しい生活様式に基づいて感染症予防に取り組んでいます。

買う 食べる

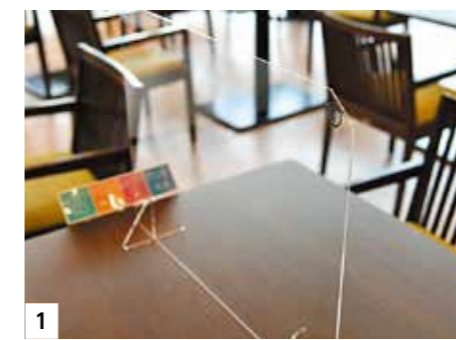
道の駅 伊達の郷りょうぜん



道の駅伊達の郷りょうぜん 駅長 三浦 真也さん

できる対策を尽くして
道の駅では6月1日から通常営業に戻りました。お客さまにはマスクの着用と消毒をお願いしています。商品の納品で農家さんや事業者さんなど多くの人が出入りします。バックヤードを含め12カ所に消毒液を置いていきます。玄関や窓を開

けて換気し、飛沫防止のシートや空間の除菌など、考えられる対策は全て実施しています。レストランには特に気をつかいます。2人掛けを1人掛け席に変更し、対面座れる席には透明の仕切りを設けました。席数をもとの60席から30席に減らし、



1. 対面の席に仕切り板が設けられた / 2. 館内のいたるところに消毒液を設置 / 3. 個包装でのパン販売は今後も継続

お客さま同士が密にならない距離を確保しました。セルフサービスだった箸やスプーンは撤去し、使い捨てのものに変えました。余分に経費はかかりますが、来場者と従業員の安心には変えられません。
新しい日常と道の駅の役割
緊急事態宣言前から感染症対策に取り組んできたので、日常になりつつあります。道の駅が閉まると農家さんや事業者さんの販売の場がなくなってしまうです。地域における道の駅の役割を果たし、伊達市の玄関口から感染が広がることのないように、対策を続けていきます。

買い物するときは
・マスクと消毒をする
・展示品には触れない
・少人数で空いた時間に
食事するときは
・おしゃべりは控えめに
・大皿を避ける
・お酌や回し飲みは避ける

緊急事態宣言が解除され、公共施設などでは新たな対策を加えながら施設を再開しました。多くの人々が利用する施設では、利用者の安全を守るために、検温や消毒が徹底されています。

遊ぶ



1. 入館時に検温と消毒を行う / 2. 滑り台待ちにもソーシャルディスタンス / 3. 絵本も1ページ1ページ消毒

スマイルパーク ほばら



スマイルパークほばら 施設長 大橋 秀助さん

新対策と以前からの対策
屋内遊び場は入場制限や時間短縮をしながらの再開になりました。新たに入館者の住所確認と検温、手指の消毒をお願いするようになりました。屋内遊び場では、毎日開館前に1時間半かけて遊具の消毒と清掃をし、開放時間の合間にも消毒をします。消毒は新型コロナウイルスが流行する前から取り組んできたことな

ので、職員も慣れていきます。消毒の頻度が上がるだけだと受け止めています。**思い切り遊んでほしい**
伊達市では感染者が出ていませんが、油断はできませんので、当面の間は、検温などの対策をそのまま続けます。利用者には、思いきり遊んで、自粛でたまったストレスを発散して、少しでも早く日常を取り戻してほしいと思っています。

働く

テレワークや時差出勤、オンライン会議など、少し前まで聞き慣れなかった言葉がさまざまな職場で飛び交っています。感染症対策を取りながら、時代の流れに合わせた新しい仕事の形を模索しています。

アサヒ電子株式会社

製造業は出勤不可避

車載部品のユニット基板を作る弊社では、テレワークができないので、社内での感染が広がらないよう対策しています。休憩は部門ごと、時間や場所を区切り、互いに密にならない体制をとり、休憩中も同じ方向を向くようにしています。取引先のほとんどが県外なのでウェブで打ち合わせをしています。元々第二工場とウェブ会議をしていたのでノウハウが生まれました。



第二工場(福島市)とウェブで打ち合わせ

ウィズコロナのものづくり
取引先に製品が届くまでには部品メーカーなど大勢が関わります。一連の中で一人も感染者が出ないよう連携しています。いかに生産ラインを保つかということは、いかにコロナと付き合うかということです。会社の運用を少しずつ変えなくてはなりません。

雇用を守り、地元で認められる企業になることが目標です。車販売不振の影響はありますが、時代に合わせ多様性を取り込み、伊達ものづくりを続けたいと考えています。

遊ぶ・運動するときは

- ・空いている時間・場所を選ぶ
- ・すれ違うときにも距離をとる
- ・狭い部屋に長居しない
- ・少人数で遊ぶ・運動する
- ・体調が悪いときは休む



感染性ごみや危険物を普段から扱う事業者は、長袖長ズボン、マスク、手袋、ヘルメットが日常の装備

廃棄する

私たちの日常に欠かせないのが「ごみの処理」です。毎日回収してくれる人がいるからこそ、清潔で快適な環境が保たれています。インフラを支える人たちは、1日も欠かさず感染対策を続けています。

恒常的な感染症対策
緊急事態宣言中は家庭ごみの量が昨年より10%以上増えて、処理が追いつかないほどでした。家で過ごす人が多かった証拠だと思えます。収集作業の負担が増す中でも、細心の注意を払って作業にあたっています。普段からインフルエンザなどに感染しないよう、ごみを直接触らない・こまめに消毒をすることなどを徹底しています。加えて作業員同士の三密を避けるよう気を付けています。衛生に気を配る作業者にとって感染症対策は日常と変わりません。

- 少しの意識でリスク減に**
カラスが荒らしてティッシュなどのごみが散乱して
- ごみを捨てる時は**
- ・鼻水をかんだティッシュやマスクは密閉する
 - ・ごみ袋はしっかりしばって封をする
 - ・ごみを触ったあとは手洗い・うがい
 - ・ごみ捨ては手袋着用で

減につな갑니다。ごみを出さない人は世界中に一人もいません。安全で迅速な収集には皆さんの協力が重要です。適切なごみの処理は社会生活の維持に直結しています。

伊達市 クリーン サービス 事業協同組合



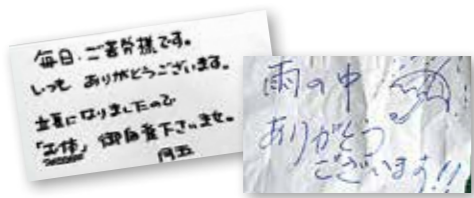
伊達市クリーンサービス事業協同組合 理事長 井上 要さん

**一人ひとりの感染症対策が
私たちの日常生活を守る**

ニュースなどで「エッセシャルワーカー」という言葉がよく使われるようになりました。エッセシャルワーカーとは、私たちが日常生活を送るために必要不可欠な仕事に従事する人のことです。一般的に医療や小売、公共交通などのインフラ業に従事する人を指しますが、私たちの生活は必ず誰かの仕事によって成り立っていることに気がつき

ます。誰もが社会の中で必要不可欠であり、それぞれの新しい生活様式の取り組みが日常を支えています。「感染症対策を続けなければ」と考えると面倒にも思えますが、慣れればそれが普通になります。モノやサービスの向こう側の「誰か」に目を向けてみましょう。自分もまた社会を構成する一人として、感染症対策に取り組みしましょう。

名前のない感謝状



緊急事態宣言の中、ごみ袋などに手紙が添えられていることが度々あったそうです。中にはごみを収集する作業者に手紙を渡してくれた小学生の女の子も。「コロナウイルスが流こうしているときにゴミを集めてくださりありがとうございます。みなさんがコロナウイルスにかからないようにゴミのすてかた、出しかたを考えていこうと思います」とのメッセージがありました。児童から手紙を受け取った作業者は「涙がでるほどうれしかった」と話していました。



つり革や手すりなどは特に重点的に消毒する

移動する

買い物や通勤・通学など、私たちの日常に必要な公共交通機関は、緊急事態宣言下でも営業を続けました。私たちの見えないところで、時間と労力をかけて「止めることのできない仕事」に取り組んでいます。

阿武隈急行 株式会社

大規模な車両の繊細な対策

阿武隈急行では車両消毒や換気、社員の体調管理などさまざまな対策をしています。20両ある車両の消毒は、ダイヤに合わせて3日に1回行います。万が一消毒薬が残っていて肌がかぶれたり、おいで具合が悪くなるお客さまが出ては困るので、揮発しやすいアルコールを噴霧して完全に乾かすようにしています。運行中は換気システムで常に空気を入れ替えるなど、換気にも気を配ります。

100%安全が最優先

車両の点検や整備を行う私たち検修担当は、緊急事態宣言中は社員を3班に分けて、互いの班が絶対に会わない体制を取りました。



阿武隈急行株式会社 運輸部運輸車両課 副検修長 丹治 浩康さん

移動するときは

- ・会話は控える
- ・混んでいる時間をさけて利用する
- ※感染症が疑われるときは、可能な限り自家用車を利用しましょう

社員が感染したら電車を走らせられなくなってしまう。地域のライフラインを止めないために、一番気を付けていることです。交通機関は100%安全でなければ走れません。ねじひとつでも欠けたら走れない。感染症対策も点検と同様に欠かせません。地域密着の鉄道として、皆さまが感染しない安全な環境作りに取り組んでいきます。

有限会社 丸和保原 タクシー

密を避ける対策が基本

お客さまと乗務員が密にならないように気をつけています。運転席と後部座席の間に飛沫防止シートをはり、密接する助手席には極力お客さまを乗せないようにしています。また、密閉を防ぐために窓を少し開けて走行しています。介護タクシーも含め、利用者の多くが高齢者です。乗務員の感染防止がそのままお客さまを守ることになるので少しも気を抜けません。



丸和保原タクシー 取締役専務 寺島 大樹さん

いつでも動ける体制を

緊急事態宣言中は、飲食店の休業とともにお客さまが激減しました。それでも休業は選択肢にありませんでした。どんなときでも急病や急用、災害が起こる可能性もあります。地元の会社として緊急時に動いていなければならぬという使命感や、日頃の恩返しという気持ちもあります。命あつてこそその事業なので、感染症予防を最優先で継続して、地域の人が困ったときに寄り添えるような事業をしていきたいです。



乗務員が定期的に車内の消毒を行う